



「ミエさん、こんにちは！！」

俺が挨拶をしたのは肉屋の娘さんのミエさん。

この日もブリッブリの脂の乗った豚肉と牛肉をミエさんに注文した。

「はい！今朝入荷したばかりの新鮮なお肉、とっても美味しいですよ、どうぞ！」

ミエさんは白いビニール袋に俺が購入した肉を入れ、差し出した。

俺は肉の陳列棚の上に置かれたレジ横のキャッシュトレイにお金を入れる。

これで今日もたっぷりの肉を手に入れた。

「ただどお客さん、毎日こんなたくさんのお肉買ってもらってますけど。すごくお肉が大好きなんですね！ウチとしては嬉しい限りです」

「はい！肉が大好物なんです！」

自信とエネルギーに満ち溢れた声でそう言い放ち、俺はミエさんに力こぶを見せた。

「えっ！！？それってウチのお肉を食べて！？」

「そうです！毎日肉ばかり食べてるんで、すっかり肉を欲する体質になっちゃって。肉食になったって言うか。筋肉とかもうヤバいんです！」

「ほんとに嬉しいわ。ウチのお肉ってとっても“精”がつきますからおススメですよ」

そう言ってニコッと笑ったミエさん。たまらなく可愛い。

「“性”・・・つきます！ほんとうにつきますよ！だってもう！」

俺はそっと股間に手を当てた。

「えっ！？」

俺の突発的な大胆な行為にちょっとだけ困惑の表情を浮かべたミエさん。

昼前の商店街には幸い誰も通っていなかったので、俺は一瞬だけズボンをずり下げてミエさんに見せてあげたのだ。

そう、肉ばかり食べて、この肉屋のビッグウインナーのように太くて大きくなった俺のペニスを！！

厳密には“生肉”の状態で見せたわけではない。

ちゃんと袋に・・・パンツと言う袋に入れた状態で見せたのだ。

だけど袋はもうパンパン。

俺の穿いていた灰色のブリーフと言う名の肉袋は、大きな山のように
はち切れそうになっているのだった。

「・・・・・・・・！！！！！」

ミエさんは思いもよらぬ俺の行動に、口に両手を当ててただただ驚い
ていた。

そして次の日から。

ミエさんが俺を見る目が変わったのは、鈍感な俺でもはっきりと分か
った。

俺が来るたびうっとり。俺が肉を買いに来た時は、彼女はいつも上の
空。肉販売の仕事も手につかないようだ。

きっと俺のチンポが忘れられないに違いない。

そしてずっと何かを言いたそうにしていたミエさんだったが、ついに
口火を切ったのはミエさんの方だった。

「お客さんの股間のウインナーのことなんですけど。この間見せても
らってから忘れられなくて……。あの、こんなことを言ったら厚かま
しいとか卑しいとか思われそうなんですけど、あの、もう一度だけ見せ
てもらえませんか？」

この店の肉のおかげで俺はこんなに逞しい体になれたのだから、そこ
の娘さんであり、同時に店員さんである彼女に見せない理由はなかった。

だからこの日は下までズボンとパンツをずり下げ、先っぽがズルズル
に剥けたピンク色のウインナーをミエさんの目の前で完全に露出した。

「こ・・・・・・・・こんな！！こんなのって！！」

ミエさんが顔を薄赤色に染めて、恥ずかしくなったのか思わず目を両
手で覆った。

凄く喜んでくれている、明らかにそんな表情だった。

ならば・・・・・・・・。

俺はそのまま店のレジカウンターの中に入り、陳列棚を開けた。

ガラガラガラ・・・・・・・・。

「俺のウインナーも一緒に陳列するよ、ほら・・・・・・・・こうやって」

俺はミエさんの目の前で、9割方勃起したチンポインナーを陳列棚に内側から入れて、肉の横に並べて見せた。

客側から見れば透明なガラス張りで、上からはライトの明るい光で照らしだされている棚の内部。

俺のチンポ肉がまるで商品の一部分みたいに並んだ瞬間だ！！

綺麗に並べて陳列されている肉の一部と化した俺のビッグソーセージ。

赤々と火照った先っぽ、そして長太い竿。そしてほんの少し黒っぽくなった根元。

その形状はまさしくブリッブリのウインナーそのものだ。

「宮本さんのウインナーが一番美味しそうなの・・・食べたい」
ついに！！

ついにミエさんが本心を吐露した。

陳列棚に並べられた肉は、お客さんのもの。

ならば、俺のこの肉はミエさんに食べてもらおう！！

———体験版はここまでです。———

続きは商品をご購入ください。